

審査の結果の要旨

氏名 李 侑勲

本論は巨大都市・江戸の「代地」と呼ばれる特殊な土地の動向に焦点を絞って、その近世中期の展開過程を明らかにした都市史研究である。

近世都市は居住者の身分に応じて、武家地、寺社地、町人地、百姓地に居住することが定められていた。都市内の土地の大部分は所有され、その所有は身分と分かちがたく結びついていたのである。その一方で、都市には「明地」と呼ばれる空地が存在した。江戸はしばしば大火に見舞われ、その度ごとに甚大な被害を受けた。幕府はとくに享保期以降、この大火対策に本格的に乗り出し、都市内各所に積極的に明地を設置するようになる。すでに居住している場所に明地を設定するためには、従前の土地所有および利用形態に鑑みて、その所有者に代替地、すなわち「代地」が与えられたのである。本論はこの代地の動向について、はじめて本格的にメスを入れた意欲的な論考であって、既往の近世江戸研究に重要な貢献をしている。

本論は史料上判明する明地と代地の時代と位置を地図上にマッピングするという作業を基本に据えながら、その動向から読み取れる幕府の意図と代地を受け容れつつ変化を遂げる町人側の論理を浮き上がらせようとする。

国会図書館旧幕引継書に断片的に記された明地・代地のリスト、町鑑などの史料を駆使しながら、代地を逐次的に追跡してゆくと、幕府は江戸の高密化による都市空間の不足の一方で火災対策のために明地を設けなければならないという矛盾に直面し、幕府は代地または代地のために収公した武家地を用いて所有権の移動を行う。このことは土地の玉突き現象を惹起し、結果として江戸の都市域の拡大をもたらすことになる。このような明地の設定と代地への移動の大規模な展開は、拡大しつつあった江戸の都市空間を背面から支えている論理であったことが説得力あるかたちで実証される。

幕府は火除けのための土地として明地と代地を設定するために、これが一見すると上からの一方的な都市計画のごとくみえるが、実は個々のケースを分析すると明地の用途に一定の自由度を認めたり、町人の請願を受けて代地をさらに移動させるなど、実状においては町人など土地所有者の論理が対立的に現われる場面が認められる。すなわち明地や代地は、近世都市において利害を柔軟に調整しつつ江戸の都市機能を維持し、空間の持続的な活用を促してゆくある種の触媒として機能していたことがうかがわれる。本論は都市計画と都市形成の中間に位置するような都市の微調整論理として明地・代地を捉えており、この視角が本論をきわめて魅力的にしている。このことは、単に近世都市分析にとどまらず、現代都市に対する示唆となっており、論文として大いに評価できる点である。

一方、代地への移動に直面する町人側にとって、土地の収公と代地の授受は社会構成員に

大きな変化をもたらしたことはいうまでもない。本論は代地へ住民のどの階層が移転したかについて具体的に検討し、実際に代地へ移転したと推測される身分は地主、家守で、その他の住民階層は他地域に組み込まれたと結論づける。

著者によると、「町人諸願之部」のなかで代地に関わる町人の願出は、3件が享保期で、1件のみが天保期である。天保期の願出から元地から独立しようとする代地の動向が読み取れる。代地が与えられた当時の請願や明地になった元地を獲得しようとする町人の動向からは元地に対する町人の執着が露見していると評価している。町人が元地に執着する理由の一つは、町共同体の維持のためであるが、具体的な事例にあたり、元地に戻れた町はごく少数である。むしろ代地に定着するか、より良い土地を求めることで再び移転しているケースが多いという注目すべき指摘が行われている。

近世初期の町は、住民によって支えられ、また住民の生活を根底から規定するもっとも基礎的な共同体であったが、都市において様々な周辺の諸身分（）が形成されていく近世後期は、住民にとってそのような絶対的な存在であった町が相対化されていく。元地に対する執着が代地での定着に変わっていく様子は町共同体の位相変化の過程として位置づけられる。近世初期の町人である家持は減少し、そこには家守に代替えた町の住民構成の変化と多様な職縁的仲間や組合の登場は町をこえてその領域を広域にしたのである。

また著者によると、明地の設定と代地への移動は単なる町中での動向ではなく、武家地、寺社地といった土地区分を超えて行われていた事実が判明している。このような明地の設定と代地への移動は江戸の都市空間が巨大化するなかでの一つの様相として捉えることができる。

以上のように、本論は近世江戸の代地について、はじめて一次史料にもとづきながら、その全貌を明らかにした研究としてきわめて重要であり、これまでの歴大な江戸の都市史について重要かつ貴重な貢献をした力作である。また巨大都市のなかの土地のやりとりという現象は、現代都市にも通ずるきわめて示唆深い論点を提供している。

よって、本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。

以上